

魚の序文

林芙美子

青空文庫

それだからと云つて、僕は彼女をこましやくれた女だとは思いたくなかつた。

結婚して何日目に「いつたい、君の年はいくつなの」と訊いてみて愕いた事であつたが、二十三歳だと云うのに、まだ肩上げをした長閑なところがあつた。

——その頃、僕達は郊外の墓場の裏に居を定めていたので、初めの程は二人共妙に森閑とした気持ちになつて、よく幽霊の夢か何かを見たものだ。

「ねえ、墓場と云うものは案外美しいところなのね」

朝。彼女は一坪ばかりの台所で関西風な芋粥をつくりながらこんな事を云つた。

「結局、墓場は墓場だけのものさ、別に君の云うほどそんなに美しくもないねえ」

「随分あなたは白々としたもの云いをする人だ……そんな事云わぬものだわ」

こうして、背後から彼女の台所姿を見ていると、鼠のような気がしてならない。だが、彼女は素朴な心から時に、僕にこう云うたをつくつて見せる事があつた。

帰つてみたら

誰も居なかつた

ひっそりした障子を開けると

片脚かたあしの鶴つるが

一人ひとりでくるくる舞まっていた

坐すわるところがないので

私も片脚かたあしの鶴つると一緒いっしょに

部屋へやの中を舞いながら遊ぶのだ。

「で、まだ君は心の中が寂さびしいとでも云うのかね」

僕は心の中ではこの詩に感服していながら、ちよつとここのところがござかしいと云えば云える腹立たしきで、彼女をジロリと睨にらんだ。

「ううん、墓の中の提ちようちん灯とうを見ていたら、ふとこんな気持ちになったンですよ。……別に本当の事なンか出やしないわ。だって、こんなの、まるで河のほとりに立つて何か唄うたっているようなの……ねえ、その気持ち判わかるでしょう」

「判らないねえ、僕はうたよみじゃないから……」

「そう、そうなの……」

本当を云えば、初め、僕は彼女を愛しているのでも何でもなかったのだ。彼女だって、僕と一緒になんぞ夢にも思わなかったろうし、結婚の夜の彼女が、「済まないわ……」

と一言漏^{もら}した言葉があつた。どんな意味で云つたのか、僕だけの解釈では、僕以外の誰かに、濟まなさを感じていたのであろう。——僕は彼女を知る前に、一人の少女を愛していた。骨格^{すくど}が鋭く、眼^めは三白眼^{さんぱくがん}に近い。名は百合子^{ゆりこ}と云つた。歩く時は、いつも男の肩に寄り添^そつていなければ気が済まないらしく、それがこの少女の魅力^{みりよく}でもあつた。

「とうとうお菊^{きく}さんと結婚なすつたンですつてね。三吉^{さんきち}さんもなかなか隅^{すみ}におけない」

黄昏^{たそがれ}の街の途上^{とじょう}で会つた時、百合子はチラと責めるように僕を視^みてこう云つたが、

歩きながら、例のように百合子は肩をさし寄せて、香料^{こうりよう}の匂^{にお}いを運^はんで来る。だが、

おかしい事には再会するまでのあの切なさも、ふと行きずりにこうして並^{なら}んでみると、夫婦^{ふうふ}になつてからもなお遠く離^{はな}れて歩く菊子の方が、僕には変に新しい魅力となつて来ているのに気がつくのであつた。

結婚して苔^{こけ}に湧^わく水のような愛情を、僕達夫婦は言わず語らず感じあつていたのだが、それでもまだ、長い間の習慣は抜^ぬけきらないもので、金が一銭もなくなると、彼女はおかしな風呂敷包^{ふろしきつつ}みをつくつては墓場の道を走つて行く。で、僕はひよ上げて、まるで下宿屋か何かの女でも呼ぶように「お菊さアん」と窓から呼ぶのだ。すると、白く振^ふり返つた彼女は、一生懸命^{いっしょうけんめい}に笑つた顔で、「お使いよオ」と答える。

「お使いなんかいんだ。帰っておいでよ」

「だって、あんた^{いちじ}苳を食べたくないの？ それを買いに行くの……」

何か眼の中が熱くなつて来て、墓場の上に^{あか}紅い粒々^{つぶつぶ}がパツと散って行くほど、僕は僕の不^ふ甲斐^{がい}なさを彼女に見せつけられたようだ。で、僕はたまらなくなつて素足のまま墓場の道へ走つて出た。

「馬鹿^{ばか}！ 俺^{おれ}はそんなにしてまで苳^もな^なぞを食いたかないんだよッ！ お帰り、帰ったらいいだろう……」

彼女は風呂敷包みを、まるでアンパンか何かのように子供らしく背後に隠^{かく}して、しぶとく立っていた。そのしぶとさが余計胸の中に来ると、僕は彼女の髪^{かみ}をひきつかんで、まるで、泥魚のように、地べたに引きずつて帰つて来た。

「君が、こんな一人^{ひとり}合^が点^{てん}をするから、前の男達も君を殴^{なぐ}つたのだろう。僕だって、小刀の一ツも投げたくなるよ。――炭^{すみ}俵^{だわら}に入れられて、一日^{あけ}揚^{いた}板^{いた}の下へ押^おし込^こめられた事があつたツて君は云つていた事があつたが、前の男の気持ちだって、何だか僕にはだんだん解^{わか}つて来たよ」

彼女は涙^{なみだ}もこぼさないでしおれていた。風呂敷の中からメリンスの鯨^{くじら}帯^{おび}と、結婚の

時に着ていた胴拔きの長襦袢が出て来た。

「こんなもの置きに行つたつて仕方がないじゃないかッ」

ふと彼女を視ると、僕の学生時代のモスの兵児帯を探し出して締めているのだ。何だか撥つたものが身内を走つたが、僕は故意にシンケンな表情をかまえていた。

「君が腹の満ちた恰好で、一ツのものを夫に与えるのは、それア昔の美談だよ。一ツしかなかったら、二ツに割つて食べればいいだろう、何もなかったら、二人で飢えるさ」

これは、素敵にいい言葉であつた。僕は僕自身のこの言葉にひどく英雄的になつたが、彼女には、それがどんなにか侘しく応えたのであろう。急に、まるで河童の子のように眼のところまで両手を上げて、しくしく声をたてて泣き始めたのだ。

この泣き方は実に面白い。まるで、闇を共にする男へなんぞの色気は、大嵐の中へ吹き飛ばしたかのように、自分一人で涙を楽しんでいる風なのだ。子供のように、泣きながら泥の上を引きずられて来た汚れた手で、足の裏を時々ガリガリやりながら思い出したようにシャツクリをする。そのシャツクリの語尾はまるで羊が鳴いているようにメーと聞えた。

「何だ！ 子供みたいに、もうこれから、こんな余計な算段は止めた方がいいよ、判つた

かね」

僕は窓にぶらさがっている濡れタオルを彼女に取ってやって、一人窓の外の花の咲いた桐の梢を見上げた。

実に青々とした空であった。僕は、何でもいいからつくづく働きたいと思った。働いてこの蟹の穴のような小さな家庭を培って行きたいと思った。僕は急に、久し振りに履歴書をまた書きたくなって、硯に白湯を入れ、桐の窓辺に机を寄せて、いつときタンザシてみた。うつむいていると、美濃紙が薄く白いので、窓の外の雲の姿や桐の梢の紫の花の色まで沁みて写りそうであった。

もはや、行きつくところまで行つた風景でもある。彼女はもう泣く事にも飽いたのか、五月の冷々とした畳の上につつぶせになって、小さい赤蟻を一匹一匹指で追つては殺していた。

「ねエ、私、お裁縫の看板でも出したいけれど……」

「へえ、君に裁縫が出来るのかね」

「大した事は出来ないけれど、袴もかさねも習つたには習つたんだから……」

「だって君、習った事と商売とは違うよ——まア、待っているさ、毎日俺も街へ出掛けて
いるんだから、何とか方法はあるだろう。——学校を出て、すぐ五六拾円にはなるだろう
と思えばただ大学は出たもののだよ、そうだろう……」

「ええだけど、知った人に縫^ぬわしてもらったっていいでしょう……」

「知った人ツて皆貧^{みなびん}乏^{ぼう}じゃないか」

「森本ちぬ子さんはどうでしょう。あの人は、とても羽振^{はぶ}りのいい芸術家のところへお
嫁^{よめ}にいらつしたツて云う事ですわ」

「馬鹿！ 食えなかつたら、食えないで仕方がないよ」

それより、僕は机に向つて、何か就職の口はないかと遠い友人に手紙を書いた。今とな
つて職業の好みもなく、また、田舎住^{いなか}いでも幸福だと云つた意味を長々と展^のべて。彼女に
も安心の行くように音読してさえ聞かせてやった。

「物事は当^{あた}つて碎^{くだ}けろさ。俺達だけじゃないよ、こんな生活は山のようにあるんだから恐^{おそ}
れる事はないだろう」

二人は、もう畳の上に坐^{すわ}つて話している事が憂鬱^{ゆううつ}になつたので、僕は彼女に戸締^{とじま}りを
命じて帽子とステッキを持^{ぼうし}つた。彼女は、紅色の鯨帯をくるくると流して自分の腰^{こし}に結び

始めた。壁の小さい柱鏡に疲れた僕の顔と、頬のふくれた彼女の顔が並んだ。僕は沁々とした気持ちで彼女の抜き衿を女学生のように詰めさせてやった。

戸締りをして戸外へ出ると、二人は云いあわしたように胸を拡げて息をしながら、青麦のそろった畑道を歩いた。秋になると、この道は落葉で判らなくなる道であった。いつか、まだ独身者であった時の百合子との散歩を僕はふと考えたものであったが、僕の後からゆつくり歩いて来ている彼女は、紙雛のように両袖を胸に合わせて眼を細めて空を見ているではないか。――

「二人位並んで歩けるよ、さあおいで」

それでも、彼女はまるで隣人同士のように遠慮してしまつて、なかなか歩を揃えようとはしなかった。

「いいねえ。ほら雲雀が啼いているよ」

「……………」

「どうしたんだい？」

「私、馬鹿なんでしょうか、風景がちつとも眼に這入らないで、今だに一生懸命で戸締りをしているようなの、私時々体が二ツにも三ツにも別れて勝手な事しているンですよ」

「君が、僕の背中ばかり見ているからさ、さア、先になつて行つてごらん、厭でも美しい景色が見えるから……」

彼女を先へ歩かせると、今度は僕の方がたまらなかつた。赤緒の下駄と云えば、馬糞のようにチビた奴をはいている。だが、雑巾をよくあててあるらしく古びた割合に木目が透きとおつていた。

「唄でもうたわない？」

「ええ……唱歌なんてもの皆忘れてしまつた……こんな時唄う歌なんてむずかしいわねえ」僕達は小川の上のやや丘になつた灌木の下に足を投げ出して二人が知っている「古里」の唄をうたい始めた。

雲雀が高く上つている。若葉が風にまるでほけて行くようであつた。僕は眠たくなつて、ゴロリと横になると、帽子を顔にかぶせて眼をとじた。瞼の部屋の中は真暗だが、渦のような七色のものがくるくる舞っている。僕のそばから離れて行つたのか、彼女が柔い草を踏んで向うへ遠ざかるのが頭へ響いて来た。

「オイ、あんまり遠くに行つちやア駄目だよ」

帽子の中からそう云つたまましばらく、僕はうたたねしてしまつたらしい。——ふと眼

が覚めると彼女は、遠くの合歡ねむの花の下で、紅の帯をといて、小川の水で顔や手足を洗っていた。

遠くから見ていると、その姿がまるで子守女のように見える。

長い間、帽子の下で眼をとしていたせいか、起きあがった時は夕方のように四圍あたりが薄暗いものに見えた。僕は袂たもとの底から、くしゃくしゃになった煙草たばこを一本出して火を点じた。さわやかな初夏の憶おもいが風になつて僕の袂をふくらます。

合歡の木の下で彼女は、やがて帯を結んで堤つみへ上つて来た。

「何だいその白い風呂敷は……」

彼女は癖くせのように、その風呂敷を背中に隠して、ニヤニヤ笑いながら「摘草つみくさしたのよ」と云つた。

あんまり食べられそうな草がたくさんあるからと云うのだ。彼女の拵おこげた風呂敷の中には、ひずるやたんぽぽや、すいばのようなものまで這入っている。白い風呂敷と思ったのは、彼女のさらしの襦袢なのであった。「だから、僕は安心して貧乏が出来るんだね」とも口に出して云いたいほど、彼女は二十三歳にしては、ひどく世帯しやたいくさいのだ。

夜は、これらの摘草を茹ゆでて食卓しょくたくに並べた。色は水々しかったが、筋が齒はにからん

で、ひずるの噛み工合などはまるで蒟蒻こんやくのようであつた。

墓場の向うの火葬場かせうばには、相変らず毎日人を焼く煙けむりがもくもくと埃色ほこりに空に舞いあがつている。——僕はもう職業を求めるために街へ出たり、履歴書など書く事は徒労だと思い始めた。僕が頭を下げて行つた先々の人間達は、いわゆるフオイエルバッハの大邸宅だいていたくと名づけられるような、中では茅屋ぼうおくにある場合と違つた考えを人達はしているものだ、で、全くもつてムザンでありすぎる。——朝眼覚めて口を洗い、ゴロリと横になつて、人を焼く煙を眺ながめている僕のかたわらに、おぼつかない手付でもつて縫いものをしてる彼女がいる。髪の毛には網あみのように白い埃が溜たまつていて、それを眼にした僕の口の中には、何か火の玉をくくんのように切ないものがあつた。

彼女はきつと「私、いい縫物屋を知っていますから頼たのんであげましょう」とでも云つて、この着物の仕事を森本ちぬ子から取つて来たのに違いない。

「ねえ、この間平井さんの奥おくさんに会つたら、早くちぬ子さんに着物を返した方がいいわ、縫物屋へ持つて行くツて云つて、菊さんは質屋へ置いてしまつて、とても困つてるツて云いふらしてるのよ、なんて教えて下くだすツただけど、まさか、こんな洗い曬さらした着物五拾

錢も借さないでしようのに、私とても淋さびしくなってしまった」

僕は沈黙だまっていた。彼女がその着物をちぬ子の家から持って来てもはや十日あまりにもなるのだが、一心になつて毎日こつこつ縫ぬっている彼女に向つて、何を僕が咎とがめだてする事が出来るだろう。

「でも、もうこれで出来上つたのだから、持つて行こう……」

彼女は、出来上つた着物を畳たたんで座蒲団ざぶとんの下に敷しいた。

「出来上つたンなら早く持つておいで、友情のない奴の品物なンぞ見るのも不愉快ふゆかいだ」

僕は一々彼女に向つてあはしては悪い、こうしては悪いなどと云う事に草臥くたびれ始め、自分のキリキリした神経もこの頃ごろでは少しばかり持てあまし気味でいるのだ。

履歴書も四五十通以上は書いたろう、あらゆる友人を頼たよつて迷惑めいわくな手紙も随分書いたが、頼んだ友人達自身なんらが何等の職もなく弱よわっている者が多かった。

彼女は着物を風呂敷に包むと、悪戯いたづらツ子らしく眼をクルクルさせて僕の両手を引っぱり、台所へ連れて行くのだ。「ねえ、私、ちぬ子さんにいいお土産みやげを持つて行こうと思うのよ」そう云つて彼女が台所の流し場を指差したのを見ると、西洋種の紅い豆まめの花や、東たはの大きい矢車草がぞつぷりと水につけられていた。

「おお綺麗きれいだなア……」

「綺麗でしょう……」

「どうしたンだい、こんなゼイタクな花束を？」

「ううん……新墓へ行つて盗とつて来ちやったのよ。私、もったいないと思うたわよ。だつて随分あるの、お金持ちのお墓なんて十円位も花束があがつててよ……」

「で、お土産に利用するのかい、仏も浮うかべないねえ……」

「だつて美しい花だものほしいわ」

彼女は、その花束を如何にも花屋から買ったかのように紙に包んで、風呂敷をかかえ日向ひなたの道へ小犬のように出て行つた。

僕は起きあがつて窓ツプちへ腰を掛けて墓の道を眺めた。墓を囲んだ杉や榎すぎえのきが燃えるような芽を出している。僕にはなぜか苦しすぎる風景であつた。夜が待ち遠しい位だ。早く夜になってくれるといい。部屋の中に空箱あきばこのように風が沁みて行つたが、生きている喜びも何も感じられないほど、すべてが貧弱なもので、二畳じようと八畳はちようきりの座敷の中には、この僕一人が道具らしい存在だ。歪ゆがんだ机の上には、訳しかけのプウシユキンの射的そうこの草そうこ稿こうが黄いろくなつたままだが、もうこんなものも売りに歩く自信もなくなりかけた。僕

はふと誰かの話を憶い出した。バルザックのプチイ・ブルジョアを半年かけて訳して、六百枚あまりが百円にもならなかったと云う侘しさを。半年の情熱をかたむけて訳したその人の気持ちはこれまた侘しすぎる以上だろう。

——僕は一二年前の大学生活の中に、かつて一度も生活の不安を感じた事はなかったはずだったが、いや、生活の事を考えるのが恐ろしかったのかも知れない、薄暗い珈琲店コーヒーの片隅で考える事は愚にもつかない外遊の空想などばかりであった。

僕はまた、壁の帽子をかぶって、彼女の厭がるステッキを持った。墓の中の散歩をころみるべく、僕もまた彼女の去った墓の道へ出てみた。熱ばんでたまらないと云った風に、雀達すずめが、ころころ地べたを転がるように飛んでいる。なるほど、彼女が云ったように、新墓には草のように花がそなえてあった。もう萎えなかけたのなどもある。三十歳、十五歳、十九歳、皆、若い仏達であった。その中で一ツ僕の眼をとらえた紀意大善姉うきよと書いてある墓標があった。墓標の裏には、レニエエか何かの「浮世うきよには思い出もあらず」と記してあったが、この言葉は今の僕の心をひどく温めてくれるものがあった。二十八歳としてあるが、どんな女性だったのだろうか……僕と同じ年齢ねんれいで亡くなった、この新墓の主の墓標

の言葉に、僕は全く口笛くちぶえさえ吹きたくなつたほど気持ちが軽くなつた。

「浮世には思い出もあらず」何とすがすがしく云い放つたものであろう。灰色の墓原の向うにこの僕の心に合わせて、誰か口笛を吹いて通る者がある。

帽子の釘くぎに一緒にぶらさげた電氣に灯がはいると、彼女は風呂敷を米で針坊主はりぼうずのよう
にふくらまして歸つて来た。

「五拾錢貫もらつて来たのよ。ちぬ子さんたらあんまり上手じょうずじゃないわねえツて云うの」

「あいツ、お前の縫つた着物を着たら体が腫はれあがつて来るだろうさ、——ところで、今き
日墓ようの中でいい言葉をみつけて来たよ」

「どんな言葉？」

「いいや、別にあらたまるほどじゃないが、明日、またどツかへ花を持って行くところはないかね。グラジオラスやチウリップがたくさんあつたよ、その墓の主なら咎めだてはしないだろう——『浮世には思い出もあらず』と書いてあつたのさ」

「浮世には思い出もあらず、変に氣取つた奴ね、私だったら『うらめしい』と書いてもら
うわ」

「ええッ、うらめしいか、なるほどねえ」

こましやくれた奴だ。彼女は米さえ買つて来ると唱歌が上手になる。一坪の厨くりやは活気を呈ていして鰯いわしを焼く匂いが僕の生唾なまつばを誘さそつた。

たつた五十銭の収入で驚おどろくべき生活のヒヤクだ。僕もあわただしく机へ向つた。今は黄いろくなつて古びたりと云えど、プウシユキンの訳に手を入れてみるべきだ。彼女は十日かかつて五十銭の収入を得て来ている。そうして彼女の唱歌は実に可憐かれんだ。——僕は膝ひざを正して字引を繰くつたが、字引の冷たさは、僕をまた白々しいものにする。字引を売つて、魚に変えた方がましだ。鰯の匂いは、懐なつかしい匂いであつた。

「さア食べましょう。実に久し振りに、実に実に……私アーメンと云いたくなるわ。あなたがよく云う食べるだけなのかい人間つて奴はッて云うのを止めましょう。さあいらつしやいよ」

玄関げんかんの食卓には、墓場から盗つて来たのであろう桃色ももの芍薬しやくやくが一輪コップに差しあつた。二人は夢中むちゆうで食べた。実に美しくつましい食慾しょくよくである。彼女は犬のよう満ちたりた眼をしている。

「今日はねえ、帰りにまた平井さんのところへ寄つたの、あなた夜番ツて職業厭かしら」

「夜番？」

「ええ夜番なのよ」

「夜番ツて？」

「とてもお金持ちのお邸やしきですって、女ばかりなんで書生さんが欲しいんだとかで、平井さんが、三吉君だろうって云うのよ。食べて三十円ツて、ちよつといいと思ったから……」

「二人で行けるのかい？」

「そこまで聞かなかつたわ、……本当ねえ」

「何だ、それじゃアつまらないじゃないか、……俺は何だつてするよ。もうこうなったら、机の前にタンザしている気持ちなンかないんだから」

彼女は口いっぱい飯を頬ばったまま引っこみのつかないような顔で、大粒な涙をこぼし始めた。実際、広い屋根屋根の下にはこうした人生の片言があつちにもこつちにもあるのだろう。

「そいで、三十円くれると云うのは本当の事なのかね？」

飯を頬ばっているの、彼女はコックリをしてみせる。

僕は字引を街で金に替えて、平井の紹介状を懷に、その郊外の邸へ行つてみた。

武者窓でもつけたら、侍が出て来そうな、古風な土塀をめぐらした大邸宅で、邸を囲んで爽々たる大樹が繁つていた。ピアノの音が流れて来る。もうそれだけでも、変に臆病になつてしまつて僕は何度か大名風な門前を行つたり来たりしたが、ふとまた

「浮世には思い出もあらず」の言葉に、急に血潮が熱くなるような思いで、僕は足音高く案内を乞うた。

出て来たのは十六七ばかりの桃割れの少女であつたが変につんつるてんな着物を着ている。僕はまず応接間に通され、ここで約一時間位も待たされた。——ユトリ才張りの油絵が一枚、なげしに朱い槍一本、六角型の窓の向うには、水の止まっている大きな噴水があつた。その噴水のまわりには、薊の花が叢のように咲いていた。

「素敵だなア！」何となく感謝してしまえる静寂であつた。やがて、僕は未亡人だと云うこの家の主の部屋へ案内されたのだが、いったい女中が何人居るのか僕はまるでリレーのように次から次の女中へと渡されて、夫人の部屋の外まで来た時は、逃げ出したいほど、何かもやもやした気味わるさを感じた。夫人は、二人の看護婦に寄り添われて、厚いむらさきの蒲団のうゑに坐つていた。

「山田は、信州の生れだそうですね」

僕は一も二もなく参つてしまった。夫人も信州の生れだと云うので、ここでは、信州の山の話が出た。

「今日は部屋をずっと見て廻^{まわ}つて、なるべく早く来るようにして下さい」

給料の話と、妻の話を持ち出そうとすると、もう看護婦が会釈するのだ。——お伽^{とぎばな}

話^しにだつてこの様な大名生活はないだろう。彼女に見せてやったなら、どんな事を云うであろうか。老女中が次々と五十幾^{いく}ツかの部屋を見せてくれた。十九歳^{かじら}を頭^{れいじよう}に令嬢^{れいじよう}が四人、女中が十八人、事務員が二人の全く女ばかりの大世帯で、男と云えば風呂焚^たきの爺^{じい}さんと末の坊^{ぼっ}ちゃんだけだと云う事であつた。

この二ノ宮と云うのは、天下の二ノ宮と云われた生糸^{きいと}商人で、一時は全く旭^{きよく}日^{じつ}の勢いにあつたと云う一家だと云う事だ。さすがに、風格も堂々としていて、五十幾ツかの部屋を見終つた時の僕の頭の中には、ただ壁だけがぐるぐる廻つていた。

老女中は、僕を玄関へ送り出すと、「お荷物を早くお送りなさいまし、女手が多いのですから片づけとて上げます」僕は僕の部屋になるのだと云う書生部屋もさつき見た。高窓が一ツに壁上には、判読するに困難な字が掛けてあつた。あの洗い流したように古びた

畳の色など、僕にはもう縁なき衆生であるかも知れぬ。

「前にいた書生さんは、この高窓からばかりカチカチカチなんて拍子木を打つんじよう、そりゃアおかしい人でしたよ。自分が恐いんで近所の野良犬を五六匹も集めたりしていたンですの……」

僕は、無意味な壁ばかりを見て歩いた事をひどく後悔した。人の住まっていない無数の壁を警護するために、彼女と離れて別れてまで暮す心はない。では、どうして食って行くのだ。「浮世には思い出もあらず」また墓標の裏の言葉が胸を突いて出た。——我々置き去りにされたインテリはいつたいどうすればいいのだ。人生はまるで今日見たあの壁の中みたいじゃないか、あつちを向いても、こつちを向いても、壁々、壁だ、壁なのだ。いつたいどうしろと云うのだ。

「もしもし終点でございますよ」眼だけが空洞のように呆んやりみひらいている僕の肩を叩いて車掌が気味悪そうに云った。

今までに、青年らしい楽しき希望も随分考えて来たが、僕の青春には、ただ「浮世には思い出もあらず」と云う言葉だけが残っただけだ。

彼女は灯もつけずに庭にいた。

「みみずを掘^ほっているの……」

手には空^{あき}罐^{かん}をさげて、黒い土をほじくっていた。みみずは百^{もん}匁^め掘れば、いくらになるとか、またどこかで聞いて来たのだろう。

僕は部屋へ這入って電気をつけた。机の上には、何かまた彼女の落書^{らくし}が書いてある。

「一、魚の序文。二、魚は食べたし金はなし。三、魚は愛するものに非^{あら}ず食するものなり。四、めじまぐろ、鯖^{さば}、鰈^{かれい}、いしもち、小鯛^{こだい}。」

彼女は猫^{ねこ}のように魚の好きな女であった。どんな小骨の多い魚でも、身のあるところをけつして逃^{のが}さなかった。——僕は字引を金に替えた奴の残りを袂^{たもと}の底に探してみた。まだ五十銭も残っていた。この金を、どうして楽しませてやったらいいだろう。

「おい、みみずは取れたかい？」

「まだまだ、今朝^{けさ}からなんだけど、たった四匹^{よっぴ}よう。めめず屋^{おや}の小父^{おぢ}さんの話ではねえ、ここは昔沼^{ぬま}だったんだからたくさんめめずが居るって云うんだけど、なかなか居ないわア」

「いくらになるンだい？」

「十八銭よオ……」

「おい、十日で十八錢じゃないのかい？」

「着物縫うより、こちらがよっぽどいいわ。土の匂いッてちよつといいわよ。……待つていらつしやい。今手を洗つて行くから……」

彼女が手を洗つて来ると、僕は茶ぶ台の上に五拾錢玉一ツと五錢玉一ツを並べた。

「まア！ お腹空^すいてンだからあんまりおどかさないでよ」

それでも嬉^{うれ}しそうであつた。彼女は急にせわしように、台所に立つて行くと、馬^{バケツ}穴をさげて井戸端^{いどばた}へ水を汲^くみに出た。茶ぶ台に置かれた空罐の中には、四匹のみみずが、青く伸びたり紅く縮まつたりしている。

夜。

雨が降りだしたのか、窓の外の桐の葉がザワザワ鳴っている。彼女は机^{もた}に凭^{もた}れて何か書いている。

「そいでね、その二ノ宮ツて家は、まるで壁ばつかりなんだよ。君だつたら何と云うかなア、庭ときたら手入れは行きとどいているが、まるで廃^{はいえん}園さ、君だつたら大根植えるといいと云い出すかも知れないね。だが、あんな壁ばつかりじゃアやりきれないよ。空一ツ

満足に見えないんだからねえ暗くて……」

「空の見える気持ちだが、そんな人達、誰かに覗かれるようでこわいンでしようねえ」

「でも、なかなか堂々たる邸だよ、大きい樹に囲まれていて、ピアノの音がして……」
「ちつともうらやましくないわ」

「うん、ちつともうらやましくないさ」

彼女はもう平然と僕の兵児帯を締めている。初めの頃のおどおどした気持ちも抜けても
うこの頃では、まるで十四五の娘むすめのように、朗らかであった。

「だけど、俺達は乞食こじきのようにお腕わんを一生持つて暮らさなきゃならない理由ツてないよ」

「それやアそうよ。だけど、ねえ、捨石になれる悟りさとでも開かん事には、やつぱり、一生
お腕の口かも知れないもの」

雨が時々、障子に汐しおのようにしぶいて来る。僕は墓場の言葉を憶い出していた。

彼女は、子供のように、河のほとりで唄うような気持ちだと云うあの淋し気な声で、

「一、魚の序文。二、魚は食べたし金は無し。三、魚は愛するものに非ず食するものなり
……」と音読するのであった。

(昭和八年四月)

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 林芙美子」筑摩書房

1992（平成4）年12月18日第1刷発行

底本の親本：「現代日本文学大系69」筑摩書房

1969（昭和44）年

入力：土屋隆

校正：林幸雄

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

魚の序文

林芙美子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>